

# 遍路と巡礼

— その構造比較 —

小嶋博巳

## 1. 「巡礼」という範疇

今後のさまざまな議論にさきだって、世界の諸文化・諸宗教がもつある種の行動様式を「巡礼」という範疇でとらえるための枠組みを確認し、あわせて、四国遍路の歴史を振り返って、その枠組み自体にも少々の検討を加えてみたいと思う。

日本の巡礼の代表としての四国遍路と世界の諸巡礼との比較を試みるとき、注意しなければならないのは、四国遍路を巡礼というときの「巡礼」と、メッカやサンチャゴ・デ・コンポステラなどへの旅をメッカ巡礼、コンポステラ巡礼と呼ぶときの「巡礼」とは、概念上のずれを含んでいる可能性があるということである。日本語の伝統的・慣用的な用法における「巡礼」と、翻訳語的・術語的な用法における「巡礼」のずれである。日本語の慣用では、熊野や伊勢に参る旅は「巡礼」とは呼ばれず、「熊野詣で」「伊勢参宮」であり、広くはその種の行動は「参詣」と呼ばれてきた。これに対して「巡礼」は、四国八十八カ所や西国三十三カ所のように、いくつもの聖地を順次たどり経巡ってゆく旅に限って使われていたのである。それが、キリスト教やイスラム教の聖地への旅が「巡礼」と訳されたことで、この語は新たにより広い意味を獲得する。この広義の用法に従うならば、熊野詣でや伊勢参宮、あるいは金毘羅や高野山への旅も、「熊野巡礼」「伊勢巡礼」「金毘羅巡礼」「高野山巡礼」と呼んでよいし、それらすべてが世界の諸巡礼との比較の俎上にのぼることになる。このシンポジウムでは、「巡礼」は、こうした広義の術語の意味で使用されることになろう。

術語的な意味における「巡礼」は、さしあたり、「聖地を訪れる宗教的な旅」と、ごく常識的に規定しておくことができる。ただ、こうした規定をめぐっては、まだ考えるべきことがあるだろうとも思う。このことは、のちの問題に少々かかわってくる。

## 2. 巡礼の諸形態

では、この意味の巡礼はどのようなものを包含するのか、巡礼を類型化するさまざまな試みを示すことによって確認してみたい。(類型論の検討にあたっては小田(1989)から示唆を得たところが大きい。)

巡礼は、聖地と巡礼者という2つの基本要素から成る。類型化の試みは、この2要素のどちらに指標をおくかによって括ることができる。

まず、聖地に指標をおいた分類として以下のようなものがある(例示は日本の巡礼とする)。

### ①聖地の構造(に起因する移動の形態)による分類

往復型巡礼/回遊型巡礼

(例:熊野詣で・伊勢参宮・金毘羅参り/西国巡礼・坂東巡礼・四国遍路)

### ②聖地の信仰圏の広狭による分類

広域信仰型巡礼/地域限定型巡礼

(例:熊野詣で・伊勢参宮・四国遍路/一畑(薬師)参り・大山参り・大島新四国)

### ③巡礼者の資格制限の有無による分類

## 開放型巡礼／閉鎖型巡礼

(例：四国遍路／千箇寺詣で・(新宗教などの)本部参詣)

### ④巡礼期間の限定の有無による分類

随時型巡礼／期間限定型巡礼(祭りとしての巡礼)

(例：四国遍路／各地の新四国巡礼)

ここでは①にのみ説明を加える。

①は、目的地がある一つの聖地とみなされ、巡礼がそこへの往復運動と意識されるものと、巡礼がいくつもの聖地を経巡る旅、巡歴する旅と意識されるもの、という違いである。日本で言えば熊野や伊勢、金毘羅への巡礼は前者、西国や四国の巡礼は後者になる。メッカ巡礼をはじめ、日本でよく知られているイスラム教やキリスト教の巡礼はほとんど前者である。他方、インドには後者の回遊型の巡礼がある。先述のとおり、日本語の慣用における「巡礼」は後者のみを指していた。この類型論は、聖地の構造の違いとして、単一聖地型／複数聖地型と表現されることも多い。しかし、子細にみれば、いわゆる単一聖地型であっても聖地の内外や巡礼路にいくつもの副次的な小聖地が存在し(熊野、伊勢、コンポステラなど)、「単一聖地」という表現には若干のためらいを覚える。ただ両者には、やはり求心的な構造とある種拡散的な構造という違いをみる必要があると考えるので、ここではその移動の形態に即して往復型／回遊型としておく。

回遊型巡礼については、それをさらに分類する類型論がある。多くの聖地を巡歴するこの型の巡礼では、一連の行為としてそれらの聖地に連続的に参る必然性、いわば聖地群を統合する原理があるはずだと考えられる。日本の巡礼研究ではこの点は早くから注意され、本尊巡礼／聖跡巡礼という分類が行なわれてきた。つまり同一の神仏を祀る聖地をいくつも訪ねる巡礼と、ある聖者の遺跡をたどる巡礼である。前者の代表が西国三十三カ所の観音巡礼、後者は四国遍路ということになる。前者には他に六地藏、三十六不動、四十八阿弥陀等々の巡礼が、後者には法然の遺跡をたどる二十五霊場巡礼、親鸞ゆかりの二十四輩詣でなどがある。じつはこのほかに、日本の回遊型巡礼には統合原理のあまり明確でない巡礼があり、例として六十六部日本廻国や千箇寺詣でが挙げられるのであるが、これについてはのちに触れる。

巡礼者に指標をおいた分類もあげておく。

### ①巡礼者の宗教的ステイタスによる分類

民衆の巡礼／修行者の巡礼

(例：伊勢参宮、近世以降の四国遍路(の多く)／奥駈け、古代中世の四国遍路)

### ②巡礼者の集団性・組織性による分類

個人巡礼／集団巡礼／集団の代表としての巡礼

(例：独行遍路／団体バス遍路・若者遍路・娘遍路／四国講・遍路講)

なお、聖地に指標をおいた分類が聖地単位に把握される巡礼のシステムの分類になるのに対して、巡礼者に指標をおいた分類は個々の巡礼行動の分類とならざるをえない。巡礼類型論を扱う際には、この点の理解が必要である。

もちろん、このほかにもさまざまな類型設定がある(星野、2001、pp.42-58)。今後、世界の諸巡礼が視野に入ってくることで、いままで気付かなかった新しい類型論が浮上することを期待したい。

## 3. 「八十八カ所」以前

つぎに、四国遍路に少しだけ立ち入って、従来の巡礼概念の理解や類型論では少々捉えにくい問題を取り上げてみたい。

現在の四国遍路を強く規定しているのは聖跡巡礼という性格である。八十八カ所をたどって四国を一巡す

ることは弘法大師空海の修行の足跡を追うことであり、四国遍路はその追体験を通して大師と同化しようとするもの、と表現できる。しかしながら、歴史的に遡ってみれば、四国遍路が一貫してこのような構造をそなえていたわけではない。

四国遍路の成立の問題は、①四国を一巡する遍歴修行の出現、②弘法大師信仰による統合と意味づけ、③「八十八カ所」の確立、の3つを区別して考える必要がある。四国遍路の歴史に関してしばしば言及されるのは、平安時代末期の『今昔物語集』や『梁塵秘抄』に「四国の辺地」という四国の海沿いの地をめぐる遍歴修行の道筋が登場することで、辺路・遍路という語の起こりの問題も含めて、これがのちの四国遍路に直結することは認めてよいであろう。ただ、この時代に弘法大師信仰に基づいて八十八カ所の巡礼が行なわれていたと考えるのは早計である。上記の②や③はさらに後代のことになる。

このうちの③の問題に限って少々確認をしておくと、四国の島を一巡する巡礼に「八十八カ所」という札所が登場したのは、おそらく江戸時代初期にあたる17世紀前半、遡っても16世紀後半であろう。目下、史料的には、寛永8年(1631)版の『せつきやうかるかや』に挿入された「高野の巻」という不思議な弘法大師伝に「四国遍路(へんど)は八十八カ所とは申すなり」とあるのが古いようである。それに次ぐのは承応2年(1653)の澄禅『四国遍路日記』で、そこにはすでに現在と同じく阿波の靈山寺を一番とする八十八カ所が成立していることがわかる記述がある。この時点で、番次を記した一種の案内記も刷り出され、一部に流布していたらしい。

もっとも、八十八カ所の権威が本当に確立する時期は、さらに下るのではないかとも思われる。たとえば、真念の『四国辺路道指南』(貞享4年[1687])は四国遍路の隆盛におおきく貢献したとされる出版物であるが、そこでは「大師御辺路の道法は四百八十八里といひつたふ。往古は横堂のこりなくおがみめぐり給ひ……」とし、「今は劣根僅に八十八ヶの札所計巡拝し……三百有余里の道のりとなりぬ」という。八十八カ所は弘法大師の定めた巡礼地としてではなく、巡礼の簡便化・簡略化の結果として説明されているような印象を受ける。また、寂本『四国徧礼靈場記』(元禄2年[1689])でも、「八十八番の次第、いづれの世、誰の人の定めあへる、さだかならず」として、「今は其番次によらず」、つまり第何番という番次は無視して、普通寺から書き始めるスタイルをとっている。八十八カ所は弘法大師に由来する権威とは認められていないのである。西国巡礼ではすでに16世紀初頭の納札に「三十三所」が見えるのに対し、四国遍路では17世紀の納札にはまだ「八十八」の数字が現れないとの指摘もある(前田、1971、p.38)。四国遍路とは弘法大師開創の八十八カ所の巡拝であるという認識が完全に浸透するのは、江戸中期以降とみた方がよいかもしれない。

四国遍路は、仮に『今昔物語集』に描かれた12世紀前半から数えるならば900年の歴史をもつことになるが、八十八カ所の巡礼として存在したのは、おそらくこの300年余のことである。弘法大師信仰による意味づけも、明瞭になるのは室町期で、最初から大師信仰によって巡礼が行なわれていたわけではない、というのがいまは大方の見方であろう。つまり、四国遍路はその歩みのなかで聖跡巡礼という構造を獲得したのである。単に巡礼者数が増減したり、信仰圏が広がったりするだけではなく、聖地の構造、巡礼の構造も変化することを忘れてはならない。

では、四国遍路が弘法大師信仰によって意味づけられた八十八カ所の巡拝というスタイルにたどりつく以前は、それはどのような巡礼だったのか。これはもとより簡単な問題ではないが、ここではあくまで巡礼というものを規定する枠組や類型論に即して考えてみる。

多数の聖地を経巡る回遊型巡礼に対して、われわれは、各聖地への参詣が一連の行為としてなされることには必然性があるはずだと考え、聖地群を統合する原理を想定し、聖地の共通項を求めて、本尊巡礼/聖跡巡礼という分類をする。しかし、上述のように、典型的な聖跡巡礼と目されている四国遍路であっても、その巡拝先が八十八カ所と特定されたのは新しく、大師の遺跡という意味づけも最初からあったわけではない。となると、回遊型巡礼に対するこうした考え方そのものも再考してみる必要がある。

このことに関連して二つのことを想起しておきたい。

一つは、六十六部日本廻国や千箇寺詣でという巡礼のあり方である。六十六部は、日本全土66か国の国ごとのしかるべき聖地に法華経を奉納して歩く巡礼とされる。実態としては、とくに近世には数年を掛けて全国にわたり数百か所の寺社を巡拝するという大規模な巡礼であった。千箇寺詣では法華の信者が行なったもので、全国の日蓮宗寺院を千か寺選んで巡拝する。規模は六十六部と同様に大きい。ところが、これらの巡礼では、どこに参るべきかという点がそれほど明確ではなかった。極論すれば巡礼地は巡礼者の自由な選択に任されており、ここに参っておかないと六十六部にならない、千箇寺詣でにならない、といった意味での札所をもたなかったのである。さきにはこれを「統合原理のあまり明確でない」と表現したが、巡礼地には国ごとの代表的な寺社であるとか、法華の寺であるといった一定の条件はあるのだから、統合原理が明確でないのではなくて、これらはそもそも聖地群の統合の度合いが低い巡礼、聖地群が固定されていない巡礼、という方がより正しいであろう。こうした巡礼が近世まで行なわれていたし、一部では近代に入っても続いていた。

もう一つは、日本における「巡礼」という語の古い用法である。この語は平安時代中期の『法華験記』などに登場するのであるが、そこではたとえば「日本国中の一切の靈所に巡礼せざるは無し」とか、「処々の靈験勝地を巡礼す」のように、「聖の修験的靈場歴遊」（速水、1970、p.264）をさして用いられていた。不特定の聖地をいわば宗教的欲求の赴くままに自由に遍歴することが、ここでは「巡礼」と表現されていると考えてよいであろう。

これらの「巡礼」では、〇〇巡礼霊場というような所与の、限定された聖地群のセットが客体としてあるわけではない。あえて言うならば、巡礼霊場は（つまり聖地群を統合する原理は）個々の巡礼者や巡礼行動のうちに内在するものでしかなかったし、また「一切の」「処々の」ともあるように、巡礼地はしばしば相当の数にのぼったであろう。それは一つ一つの聖地の個別の聖性や求心力よりも、それらをつなぐ遍歴というモチーフの方に軸足を置いた行動様式であったとみることもできる。六十六部や千箇寺は、こうした遍歴のあり方を遅くまで残していたのだと言える。そして、巡礼地が八十八カ所に収斂する以前の四国遍路もまた、多分にそういう性格の巡礼であったのではないか。大小の聖地を巡拝しつつ四国の島を遍歴する、つまり「横堂のこりなくおがみめぐ」る修行者たちの姿を思い描く。

こうした行動様式を巡礼論のなかにどう取り込んでゆくかというのは、じつは巡礼研究の課題の一つではないかと思う。もちろん、『法華験記』などがそれを「巡礼」と書いているということと、その行為を術語としての巡礼の範疇に含めるかどうかということとは別問題である。しかし、回遊型巡礼（つまり日本語の本来の意味の巡礼）の問題を考えると、こうした行動様式を視野から排除するのは生産的ではないであろうし、さらに言えば、単に回遊型だけの問題ではなく、巡礼の一類型として「参るべき聖地が特定されていない巡礼」というものを設定することはまったく不可能かどうか、考えてみる価値もあるのではないか。私は、いわゆる巡礼とはパッケージ化された宗教的遍歴であると表現してみたいのであるが、作業仮説としてさきのような類型を立ててみることは、宗教的遍歴と巡礼との関係、あるいは巡礼の誕生という問題に対する有効なアプローチにつながるのではないかと考える。

## 文献

小田匡保、1989、「巡礼類型論の再検討」『京都民俗』7、京都民俗談話会

速水 侑、1970、『観音信仰』塙書房

星野英紀、2001、『四国遍路の宗教学的的研究』法蔵館

前田 卓、1971、『巡礼の社会学』ミネルヴァ書房